



・Tackle Guide

ハリスは8号6メートルを標準に、食い渋りには6号、入れ食い時には10号まで用意しておきたい。ただ、5号と10号では強度に大きな差があるので、できれば細ハリス使用時は標準よりややライトなタックルを別に準備するのが理想だ。

朝のゴールデンタイムは1時間ほどで終焉する。それまでの嵐のような状況からウツのような沈黙が始まる。同じコマセ釣りでも、マダイなら時合が過ぎててもポツリポツリとアタリがあるものだが、ワラサの場合はオンとオフが非常にはっきりしていて、いったん食いが止まると、ピタッと音がするくらい口を使わなくなる。

無論、そんなことは沖釣り師ならばだれもが百も承知。だからこそ、食っているときに、いかに効率よく数をのばすかが重要になる。



▲南伊豆のワラサは12月も大いに期待できそうだ

朝の時合がとっても重要 南伊豆のワラサ開幕!!

11月12日、南伊豆下田須崎港の大黒屋へと向かう。狙いは開幕したばかりのワラサだ。早朝5時に港に到着するが、

岸壁沿いの駐車スペースはすでにビッシリと埋まっている。この光景に思わず30数年前のワラサフイバーを思い出す。仕方なくちよつと離れた空き地にスペースを見つけて車を停め、道具を岸壁へと運んだ。しかしここで集まっている人の服装と道具に違和感を覚え、よくよく観察すると、どうやら磯釣りの大会があるようで、この人込みの多くはその参加者だった。6時少し前、5人のお客さんとともに、土屋裕司船長の操船で岸壁を離れる。北東の風が少し吹いているが、釣

バラシを少なくするには

焦りは禁物。事実、わずかに1時間の時合でトップは6本を上げ、スノは2本に終わった。釣り座の影響はあまりなかったことを考えると、やはりこの差が腕と経験の違いといえるだろう。

この日も目立ったのがバラシ。手返しを重視するあまりヤリトリが強引になり、ハリス切れや口切れが頻発していたようだ。

3〜4キロ級でも、ワラサのスピードとパワーを侮ってはいけぬ。無理をすれば8号ハリスでも簡単に切れる。ハリ掛かり直後のファーストランではとりにあえず走らせ、引きが収まったタイミングで遊ばせないよう巻くようにすれば、大抵はなんとか取れる

りにには支障ないだろう。船は爪木崎をかわして北上し、白浜沖のポイントに到着した。朝の時合は入れ食い

かつては神子元島海域がワラサの主戦場だったが、近年は白浜沖に回遊することがほとんどらしい。船長から、「とりあえずハリスは5〜6



▲早朝の時合が勝負時

メンタル面も大切。一般家庭ならワラサが2本もあれば土産としては十分。釣果よりも釣趣を楽しむつもりで臨めば、おのずと気持ちに余裕も生まれ、ヤリトリもスムーズになる。スイッチが切れたワラサに口を使わせるのは至難の業だが、船の下に魚がいるのは間違いない。当然ながら可能性がないわけではない。

飽きずに投入を繰り返して、コマセを途切れないようまき続けていけば、中にはパツリと食いつく変わり者の個体もあるだろうし、第2波が訪れることもある。

当日は残念ながら第2波と呼べるような食いはなかったものの、変わり者は数本いて沖揚がりまでに3本追加した人が計9本で竿頭となった。中にはハリスを4号に落として見事に食わせた人もいたが、竿頭の方は朝の1投以外はずっと8号で通したというから興味深い。

こうしてこの日のワラサ釣りは13時に終了。釣果は3.5〜4キロ級が1人2〜9本。ほ



▲3〜4キロ級がアベレージ

かにマダイ、イサキ、メイチダイなどが交じった。相手が相手だけに今後の予測は難しいが、この日の反応と朝の食いつぶりをみる限り、しばらくはいい釣りができそうな気配だ。

知得! Tips and Tricks

メイチダイを侮るなかれ

朝のチャンスを逃した私は、当然のようにワラサオデコをくろう。しかし沈黙の時間帯に1キロ弱のメイチダイ、25センチ級のイサキとカワハギを釣って土産にすることができた。

メイチダイは特別珍しくない代わり、狙って釣れるほどでもないという微妙な存在。その魚体はパンパンに太り、さばいてみると、内臓の周りはベトリと脂肪が取り巻いていた。刺身で賞味したが、こんなにおいしい魚だっけと思うほど。もしも今後、お目にかかれた折には、くれぐれもそんなに扱うことのないよう心してほしい。

▲ゲストのメイチダイは脂乗り

号でやってみて」とアナウンサーがある。

投入開始時間の6時半を待つて釣り開始の合図が出た。指示ダナは38メートルなので、水深は45〜50メートルほどだろう。

周囲には7〜8隻の僚船が集まっている。30数年前のビーク時には、200隻もの大船団が形成されていたことを思えば少々さみしい。

開始早々、右舷大ドモの竿が絞り込まれ、すぐに隣でも竿先が海面に突き刺さる。いきなりのゴールデンタイム突入だ。

いつもなら、コマセが拡散するにつれて魚が船下に着き、徐々に反応が濃くなっていくのが普通だが、今日は投入前から特濃の反応が出ていたと

これならいけると踏んだのか、2投目から標準の8号ハリスに替える人もいたが当然のようにアタリは続き、この様子なら10号でも12号でも食いは変わらないだろう。ワラサのサイズは3.5〜4キロ級とまずまずだ。

やがて魚の活性が上がり群れが上ずってきたのか、指示ダナが35メートルに変更される。

コマセを振ってタナを取れば、すかさず竿がギューンと曲がる。実にイージーな展開だが、これがワラサ釣りの特徴でありだいたい味でもある。ただし、ハリ掛かりまでは簡単でも、そこから取り込むまでのプロセスにはテクニクと経験が必要だ。

●船宿information

南伊豆下田須崎港

大黒屋

☎0558-22-1970 (詳細は巻末の情報欄参照)

▶料金=ワラサ乗合一人1万3000円 (付けエサ、コマセ、水付き)

▶備考=予約乗合、12月から6時集合。マダイ&イサキ、アカハタ&カサゴへも出船

土屋 裕司船長